
<ゆめにっき二次創作>　さいごの2ページ

ostrich

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ゆめにしき」一次創作　さここのページ

【著者名】

N6459Q

【作者名】

ostrich

【あらすじ】

窓付家の日記を「さこ」のページ。

月 日 曜日 曇り

また夢を見ました。いつもと同じ夢を。今日は、一人の人に会つてきました。

一人目は、人と数えていいのかちょっと分かりません。でも、わたしは彼を人だと思うことにします。彼は、この星ではないどこか別のところ、その赤茶けた土の下にいました。あの星は色合いとは裏腹にずいぶん冷え冷えとしていたのだけれど、彼がいるところは一層冷たい空気に覆われていました。長い階段を下つて、何か機械のようなものが散らばっているところに出たのです。でもそれは多分廃墟で、少なくともわたしが訪れた時には寂しい金属の塊だったのだと思います。わたしがしばらく歩いていると、手の甲が濡れるのを感じました。思わず上を見ると、大きな眼があつたのです。それは心臓のような輝きを持つた眼で、生命を感じさせる様子で光っていました。眼だけではあります。彼の身体全てが美しく深い光を持つていました。彼は一つ眼で、体から直接一本だけの足が生えていて、わたしよりも大分背が高かつた。身体は周囲に溶け込むような濃い青色でした。

反射的に、わたしは彼を包丁で刺してしまいました。今までこの夢の中でやつてきたのと同様に。怖いのです。この夢で出逢うものすべてが。

ゆっくりと目を開けると意外な光景が広がっていました。彼は、消えていなかつたのです。今までわたしがこうやって刺してきたものは皆すぐに消えてしまつたのに。足に確かな刺し傷が残つていて、そこから赤い血が流れていきました。

そんなとき、ようやくわたしは気付いたのです。彼が泣いているということに。痛いからじゃない。何で泣いているかは分からぬし、涙を止ませることも出来ない。彼はただ泣いているのです。こ

の寂しい夢の底で、美しい涙を流しているのです。変な感じだけど、わたしはそんな彼を綺麗だと思いました。そして、ただ抱きしめることしか出来なかつた。でもそのとき思つたんです。ああ、わたしはずつとこうしたかつたんだつて。傷つけたいわけじゃない。ただ、抱きしめたかつただけなのだと。

どこか、懐かしい感じがしました。

これが一人目でした。

もう一人は、既に会つたことがある人でした。さつきの邂逅のあと、わたしが自分の意思で会いにいったのです。何だか合わなくてはならない気がして。彼女は金髪のボニー・テールが良く似合う女の子でした。この現実離れした夢の風景の中で、極めて女の子らしい部屋に住んでいます。初めて逢つた時、とても優しい笑顔を向けてくれたと憶えています。でも、あれはわたしが悪かった。何度も何度も彼女の部屋に出入りして、ついに彼女が恐ろしい化け物の姿でいるところを見てしまつたのです。今になって思うのは、あの化け物は私自身なのだということ。完全に綺麗なだけの人間なんていません。分かつていたはずなのに、わたしは彼女にそれを求めました。千回わたしが彼女の部屋に出入りしたのならば、千回優しいまでにしてほしかつたのです。もちろんそれは無理なことでした。そんなことを求めるわたしの心は汚かつた。だから、謝らうと思つたのです。

何でそんなことを考へるに至つたかというと、さつきの出来事が影響していると思うのです。涙を流している彼をわたしは綺麗だと思った。そして、抱きしめることが出来た。何か、分かつた気がするのです。

実際その日の彼女も優しい笑顔で迎えてくれた。でもどうしてもわたしは弱いようで、あの化け物の姿がちらついて離れません。歩み寄ろうとしても、足が動かないのです。彼女は待つ以上のことはしない。わたしが踏み出さなければならないのです。

彼についた傷痕は消えなかつた。でも、彼は怯えて襲いかつて

くねりとなびせざるに、ただ黙つて涙を落していた。

「

わたしはひとつの名を口にしました。

ああ、そうか。

わたしはどこか別のところで彼女のことを知っていた。
彼女の笑顔は言っています。ここにいてもしようがないでしょう

と。

ようやく、わたしにも決心が付きました。あの扉を開けてみよう
と思ったのです。この夢の中で唯一開けていない、わたしの部屋に
あつたのと同じ扉を。

そうしてその扉を開けると、やはりその向こう側は恐ろしかった。
赤い、不気味な人がいた。でも、わたしはその先に進みたいと思つ
た。

気づけばわたしは現実にいました。それは日覚めというよりは、
あの扉をぐぐってこちらに来たのだと考えた方がいいのかもしれません。

まだ肌に夢の中の感覚が残っていました。

月 日 曜日 晴れ

またあの夢を見ました。そして多分、もう一度と同じ夢を見るこ
とはないでしよう。

不思議な夢でした。夢の中で手に入れたものを一つ一つ捨ててい
くのです。いや、捨てるところ言い方は相応しくないかもしませ
ん。どちらかといふと、一つ一つ大事に置いてきました。

どんな形にしろ、この夢には別れを告げなければならないと思つ
たのです。

二月一日月曜日 晴れ

ベランダに出て、台に上ると色々なものが見えました。

空。

太陽。

鳥。

ビル。

道。

友達。

ここはすごいぶん高いところだけど、はつきりと分かりました。ポ

ーテールの女の子がこちらに向かつて手を振つているのです。

「

わたしの名を呼びながら。

「

わたしも、あなたの名を呼んだ。

わたしは台から下りて、部屋に戻りました。扉を開けるのです。扉の向こうにはまた怖い世界が広がっているのかもしれない。でも、そうとしても、わたしには愛することが出来るのです。怒るでもなく怯えるでもなく、ただ黙つて涙を流すことが出来るのです。扉を開けました。

光が差し込んできました。

さよならわたしの夢。

(後書き)

いくつかのイベントについての解説と、歪曲したハッピーエンド。
原作のラストはあんまりだと思ったので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6459q/>

<ゆめにっき二次創作>　さいごの2ページ

2011年2月4日21時55分発行